渓谷に遊ぶ

毎年のお盆休みは、いつも診療所の床掃除のみで終わってしまいます。週末は読みものや調べものなどが多くて、外出はまずしません。考えてみれば渓谷の風景や山の蝉の声には、十年前後接していなかったことになります。そのことに気づくとやたら懐かしくて、その場に身を置きたくなりました。宿泊する時間は取れそうもないので、今夏のある日曜日に近場で探して鳩ノ巣へ向かいました。近場と言っても渓谷ですから、なかなか遠いものです。鳩ノ巣は東京の西の端となる奥多摩にあります。青梅駅までは近郊線で難なく着きますが、そこから青梅線は単線になりますので、対向列車を待つための停車時間など、時間的な遠さが際立ってきます。鳩ノ巣駅に着いたのは、出発して 2 時間を超えていました。

無人の駅舎を出て「さあ、渓谷へ」と思いきや、他には何もない駅前広場に小さなそば屋が一軒、「生ビール」と書かれたのぼりが風にはためいていました。いきなりこういう光景から始まるとは想定外でした。考えをまとめる暇もなく店頭のテーブルに着席し、風に吹かれながらお新香をつまみに生ビールを 1 杯、そして山かけそばを 1 杯。店の方に道を尋ねると、裏手から下れば吊り橋、そしてその下に渓谷が見られるとの話でした。言われたとおりに進むと、ほんの数分でその場へ出ました。こじんまりとした渓谷は、凡そ雄大な風景とは言いがたいものです。しかし私は、学童期から家族旅行などでこの奥多摩の自然に親しんできており、自分にとっては心が落ち着く大好きな景観のひとつなのです。

遊歩道に沿って下り、渓谷の岩に腰を下ろして、足を川面に浸けながら青空を仰ぎます。渓流の音色と混然としながら、蝉が我こそはと競って声高に鳴いています。松尾芭蕉の「閑（しずけ）さや岩にしみ入る蝉の声」が思い浮かびました。芭蕉の俳句は心象風景を 17 文字に凝縮したものと言われます。そうだとすれば、何となくこの俳句の意味は自分なりに理解されてきます。精神の深奥に入り込んで時が止まると、渓流のざわめきも蝉の声々も一瞬にして消えてしまい、永劫の時の流れに裏付けられた岩々の常なる存在が際立ってきます。それが「閑さ」。この黙して不動な岩々は蝉の声がしみ込んでしまう程の永い年月を見届けてきた幽玄な存在です。つまり「しみ入る蝉の声」とは悠久の時の流れを象徴しており、且つ人間社会の狂騒を「蝉の声」に譬えて、その愚かさや無常さを岩々の神々しい姿に対比させていると私は解釈します。私が渓谷を求めたその目的は、まさにそのような空間を実感し、そこに身を置きたかったからなのです。

鎌倉時代の禅僧として高名な道元は、難解な著作『正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）』の中で渓声山色について触れています。彼は人間の感覚を超越した感性で事物を見つめるように説き、そのことを「山流水不流（山は流れ水は流れず）」と表現しました。渓谷に身を置きしばし感覚を研ぎ澄ませます。「山流」、これは何となく分かる気が致しました。写真家の土門拳氏は、夕暮れの平等院鳳凰堂を見上げた時、その光景が目まぐるしい速さで「走っている」と表現しました。なるほど、わずかな時の流れによって風景は微妙に変化し、その瞬間瞬間が過ぎ去っていくのだと思います。遠景の山の陽の当たり具合、あるいは風にそよぐ葉の動きなどは、二度と戻って来ない刹那の調和の連続です。まさに山は時空間を流れているのだと感動しました。しかし「水不流」が理解できないのです。どうしても川は流れて見えてしまいます。『方丈記』の冒頭のフレーズ、「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず」は、鴨長明が論語等を参考にして創作した文言と言われますが、道元と同時代を生きた鴨長明の目にも、確かに川は流れているように映っていた証拠だと思います。

その日は夕方から雨の予報だったため、2 時間程で現地を離れ、「水不流」の意味は次回までの宿題と致しました。都心に戻ると、駅の構内で路上生活者と思われる人物が、地面に寝そべって人々の流れを見ていました。低い位置から途切れることのない人の流れを見ている彼。そんな彼の視線を想像したとき、機と「水不流」の意味が閃きました。きっと彼の目には、歩き去っていく個人の顔は映っていないに違いありません。彼は個を見ず、恐らく全体を感覚しているのです。渓谷の川の流れは、鴨長明が表現した「もとの水にあらず」ではなく、芭蕉が捉えた岩々のように、無始の時代から途切れることなく永劫在り続ける、時が静止した存在、視覚では捉えきれない対象なのだと思いました。わずか半日の私の夏休み。しかし自然の中に身を置き思索に耽ることは、思いのほか明日への活力につながるものでした。

（ISID 健康管理室だより　令和 1 年 10 月）